

ラテンアメリカ 1968 年論

(3) キューバの場合

小倉英敬

〈アブストラクト〉

En 1968 se han ocurrido los cuatro acontecimientos importantes en Cuba. En enero se ha producido la purga contra el Grupo “Microfracción” prosoviético encabezado por Anibal Escalante, en marzo fue declarada la liquidación general de los negocios de iniciativas individuales, en agosto fue anunciado por Fidel Castro su apoyo a la invasión de las tropas soviética y de los países del Tratado de Warsovia a Checo- Eslovaquia y en noviembre se ha ocurrido “el caso Padilla” que las autoridades culturales criticaron a su posición del poeta Heberto Padilla que ganó en ese año con su obra “Fuera de Juego” el premio de poema Julian del Casal convocado por la UNEAC (Unión Nacional de Escritores y Artistas de Cuba).

En este artículo el autor intenta analizar qué significado tuvo “el Caso Padilla” que ha resurgido en 1971 causando la división de los intelectuales europeos y latinoamericanos que tenían la posición favorable a la Revolución Cubana en la década de 1960, dentro del contexto del proceso revolucionario en base de análisis del comportamiento de los intelectuales que tenían el origen de las clases burguesa y media.

1. はじめに

キューバにおいて 1968 年に生じた大きな出来事は、1 月に生じた親ソ派のエスカランテを中心とする「マイクロフラクション (Microfracción)」グループの粛清、3 月にフィデル・カストロ首相 (当時) が発表した全ての個人営業の廃止、8 月にチェコスロバキアで発生したソ連・ワルシャワ条約機構軍による侵攻に対する支持表明、11 月に発生した UNEAC (キューバ作家・芸術家協会) が詩人エベルト・パディージャを「反革命」扱いにしたことに発した「パディージャ事件 (El Caso Padilla)」の 4 つの出来事であったと言える。

キューバにおいては、1959 年 1 月に革命が成立して以来、農地改革などの社会改革推進を原因とした米国との関係悪化と、それを契機としたソ連との関係強化の中で、1962 年 10 月にキューバ・ミサイル危機が発生した。しかし、ミサイル危機の決着の過程でキューバがソ連に対する批判的姿勢を強めたことから、一時的に関係冷却期が続いたが、1960 年代後半にキューバ経済が低迷化したために、1967～68 年にソ連及び東欧社会主義諸国からの経済支援を必要とする事態に至った。

このようなキューバ革命プロセスの中で、1968 年 8 月 23 日にカストロ首相 (当時) が、ソ連・ワルシャワ条約機構軍によるチェコスロバキア侵攻を遺憾としながらも社会主義圏を防衛する立場からこれを容認する姿勢を表明した。そのためキューバの内外において、キューバがこのような従来の姿勢からは考え難い姿勢を採ったことに対する批判が強まった。このようなキューバに対する批判の強まりに対抗するかのよう、キューバ革命政権による国内の批判的意見に対する取り締まりの強化が実施された。「パディージャ事件」は、このような文脈の中で発生したと考えられる。

本稿は、1968 年に発生し、1971 年のパディージャの逮捕と彼による自己批判に至る、所謂「パディ

ージャ事件」が有したキューバの革命プロセスの中における歴史的意味を考察することを目的とする。

2. キューバ 1960 年代

(1) 亡命者

1959年1月1日にキューバ革命が成立して以来、有産層及び中間層を中心としてキューバを脱出して米国等に亡命する人々が続出した。1959年から63年までの4年間に約25万人が国外脱出した。特に1965年にはフィデル・カストロ首相（当時）が9月28日にマタンサス州カマリオカ港から10月10日までに脱出することを許可した結果（実際には11月15日まで延長された）約5000人が出国した。その後1980年のマリエル事件が発生するまでに国外脱出した人々の数は不明だが、マリエル事件の際には12万5000人が脱出し、その後1994年に大量海上出国が発生した際には約4万人が脱出したとされる。2010年に米国で国勢調査が実施された際の、自己申告によるキューバ系の人々の数が160万8835人であったことから考えると、1959年以降2010年までの出国者は約80万人であったと推定される。

キューバから脱出者（亡命者）の流れは、①1959年から1968年まで、②1968年から1980年まで、③1980年から1990年まで、④1990年以降の4時期に区分しうると考えられる。本稿で扱う1968年に端を発した「パディージャ事件」に象徴される文化人・知識人の体制批判は1970年代の脱出志向の起点となったと考えられる。例えば、「パディージャ事件」が発生した際にキューバ政府に対する批判に参加した作家のカルロス・フランキ（1921～2010）は、1967年頃までに体制に批判的姿勢をとるようになりイタリアに居住し始めたが、革命政権と決別したのは、「パディージャ事件」に先立って同年8月に発生したチェコスロバキア侵攻を非難する共同書簡に署名したことをきっかけとなった⁽¹⁾。他方、当事者となったパディージャが、コロンビアのガブリエル・ガルシア・マルケス（1928～）の援助でキューバ脱出を許可されたのは1980年であった。この年に発生したマリエル事件を通じて脱出した出国者の中にはレイナルド・アレナス（1943～1990）も含まれていた。このように1968年から1980年という時期は、脱出（亡命）の流れの中で明確に区分しうる一時期を構成したと考えられる。

他方、1971年に生じたパディージャによる自己批判を中心とした「パディージャ事件」に接することとなったノルベルト・フエンテス（1943～）は、後述の通り、1989年7月に発生したオチョア事件をきっかけとして体制から離反し、1993年に海上から不法出国を試みたが失敗し、1994年にガルシア・マルケス、スペインのフェリペ・ゴンサレス首相らの仲介で出国許可を得て出国した。

このように革命当初は同調していた文化人・知識人が体制に批判的となり体制から離反し亡命・出国が生じたのは1968年以降であったことは注目に値する事実である。この年にはトマス・グティエレス・アレア（1928～1996）監督の作品『低開発の記憶（Memorias del Subdesarrollo）』が制作されている。この映画は、エドムンド・デスニエス（1930～）が1965年に出版した同名の小説を映画化したもので、革命直後の1961年を背景としてキューバに残った有産階層出身の知識人の、心情的には革命を擁護しつつも行動パターンにおいて革命の方向性とは相容れない行動をとる知識人の心理的葛藤を扱った作品であった。この映画が1968年に制作されたという事実は、1968年という年が文化人・知識人が革命への支持か離反かという境目に立たされた年であったことを示すものであったと言える。

(2) 経済情勢と親ソ派粛清問題

ミサイル危機の收拾の過程でカストロ首相（当時）は対ソ関係において「つかず離れず」の姿勢を続けた。例えば1964年10月にニキタ・フルシチョフ（1894～1971）首相が失脚した際、カストロはソ連を訪問して新しい指導者となったレオニード・ブレジネフ（1907～1982）を表敬することはなかった。また、チェ・ゲバラ（1928～1967）は1965年2月にアルジェで開催されたアジア・アフリカ人民連帯機構会議における演説でソ連の対途上国経済外交を批判し、国内的には物理的的刺激以上に精神的刺

激を重視する姿勢は示していた⁽²⁾。また、カストロは1967年11月にモスクワで実施されたロシア革命50周年記念式典にも招待を辞退している。このようなキューバ側の反抗的な姿勢に対し、ソ連は1968年度の通商協定に関するキューバ側の要求を拒むなどの圧力を加えた。同年のキューバ経済は低迷状態にあった。1963年に発表された砂糖生産を基軸とした新しい経済政策の実施に伴い、1970年の砂糖生産量を1000万トンと設定する目標が掲げられ、その目標達成が目指された。1968年からは大規模な動員が始まり、各地でサトウキビの植え付けや刈り入れが大々的に実施された。しかし、この計画は、トウモロコシや綿花、米など多くの作物の生産減少や、実現性の低い分野への投資による財政の損失などを生じさせていた。カストロはこの低迷した経済情勢下で、3月13日に行った演説において個人の所有であった小売業の国有化に向けて個人営業の全面廃止を発表し、さらに経済低迷を悪化させた。従って、この時期にソ連との通商になんらかの不具合が生じることは、キューバ経済にとって死活問題であった。当時キューバは、国内的には一部地域における通貨の廃止など理想主義的な路線を堅持する一方で、世界共産党会議への欠席やキューバ国内の親ソ派の粛清など、ソ連との間では一定の自立性を強く意識した姿勢を堅持していた。

特に、そのような傾向の象徴として指摘しうるのが親ソ派の旧人民社会党（PSP）系のアニバル・エスカランテなどが粛清された「マイクロフラクション」事件であった。エスカランテは旧PSPの立場から1961年に革命3組織が統合された「統一革命組織（ORI）」が結成された際、25名からなる執行部の一員に選出された。しかし、1962年3月26日に「セクト主義」と批判され、その後モスクワに滞在していたが、1967年10月からカストロ指導部に対立する旧PSP系グループの摘発が開始された際、その主犯格として告発され禁固15年を宣告されて失脚した。旧PSP系ではカルロス・ラファエル・ロドリゲス（1913～1997）やブラス・ロカ（1907～1987）がその後もORIの後身である新共産党（PCC）の幹部として生き残ったことを考慮すれば、「マイクロフラクション」事件は単なる「7月26日運動」グループと旧PSP系の対立ではなく、革命の指導権をめぐるカストロ派とエスカランテ派の対立であったと考えられる。「マイクロフラクション」グループは、カストロ指導部が進めていた路線に対して、①プチブル出身者による党の支配と人事権の掌握をプロレタリア指導に変更すべきである、②武装闘争のための主観的・客観的条件が存在しない場合における武装闘争に反対する、③短期間で行われる動員や幹部の移動が専門家と経験の蓄積の障害になっている、④2年間の農業下放が何らの問題解決にも寄与しておらず、士気を高めるには物質的刺激が必要である、⑤計画経済が十分に機能しておらず経済の調和的発展に寄与していない、⑥マルクス主義文献の配布が十分ではないために党がイデオロギー的に脆弱な状態にある、⑦日曜日毎に実施される農業でのボランティア労働は輸送費を公示させるだけで実質的な成果を生んでいない、等々の批判を行った。明らかに当時のカストロ体制が展開していた路線を批判するものであったが、特にカストロ指導部を「プチブル出身者」と決めつけたことが大きな対立点になったものと思われる。また、「マイクロフラクション」グループは、党の路線に反対する姿勢を表明した文書をキューバ国内で広範に配布したほか、ソ連や東欧社会主義国の共産党幹部に党の路線に背反する姿勢を説明するなど、国際的にも党内の不和を知らしめる活動を行っていた。従って、カストロ指導部は党の団結を重視する立場から、即ち主張する路線の違いのみならず、その反党的な行動様式から「マイクロフラクション」グループの粛清が必要と考えたのであろう。

このように1968年1月にカストロ指導部は親ソ派と目された「マイクロフラクション」グループを粛清したため、ソ連とワルシャワ条約機構軍のチェコスロバキア侵攻が発生した際、国際世論はキューバがソ連を非難するものと予想する向きが強かった。しかしながら、キューバが選択したのはソ連支持であった。その理由として、キューバ側はチェコスロバキアの主権が侵害されたことは正当化できないが、反革命的な動きが強まる傾向も見られ、帝国主義の手中に陥ることは阻止せざるを得ないと主張した。即ち、キューバとしては侵攻に賛成することはできないがドブチュク路線ではチェコスロバキアは

帝国主義の手中に陥る可能性もあるために、敢えて二者択一するならソ連支持を選択するということがある。キューバのこの選択には一つの意志が存在したと考えられる。それは、侵攻を非難すればソ連との関係が完全に断絶してしまう危険性があったためであろう。

しかし、このキューバによる事実上のソ連支持は、キューバ革命以来革命政権を支持してきた世界中の進歩的知識人、特にラテンアメリカの変革志向を有する文化人・知識人のキューバ離反を生じさせることになる。キューバ国内においてもカルロス・フランキのような例が生じた。そして、チェコスロバキア侵攻の支持表明に続いて、ラテンアメリカの親キューバ派の文化人・知識人のキューバ離反を加速させることになったのが「パディージャ事件」であった。

3. パディージャ事件

(1) 1968年：「パディージャ事件」の発生

1968年10月、パディージャの批評的な詩集『ゲームの外で (Fuera de Juego)』がUNEAC (キューバ作家・芸術家協会) 主宰のフリアン・デル・カサル詩賞を獲得した。審査委員会は3人のキューバ人、ホセ・レサマ・リマ (1910~1976)、ホセ・サカリアス・タリユー (1893~1989)、マヌエル・ディアス・マルティネス (1936~)、および2人の外国人、英国人の翻訳家ジョン・マイケル・コーヘン (1903~1989)、ペルーの詩人のセサル・カルボ (1940~) の5名から構成されていた。

その前年の1967年にパディージャは、雑誌『髭を生やした鱷 (El Caimán Barbudo)』で、キューバの作家リサンドロ・オテロ (1932~2008) の『ウルビーノの情熱 (Pasión de Urbino)』に厳しい批評を加えていた。1964年、オテロはその本でスペインのセイス・バラール社のブレーベ図書賞を狙ったのだが、ギジェルモ・カブレラ・インファンテ (1929~2005) が『三匹の淋しい虎 (Tres Tristes Tigres)』で受賞した。パディージャは自分が書いた記事でこう言い切った。当時文化審議会の副会長だったオテロの作品のような、実に凡庸な作品が大きな注目を集めたが、この島ではカブレラ・インファンテの作品のように文学的水準がきわめて高い本について、政治的理由で語るができないのは残念である、と。そして彼は、次のように締めくくっている。「キューバでは、単なる作家は、短編作家兼編集長や詩人兼編集長たちがその『編集』の名を隠れ蓑にして行う攻撃を受けずに、副会長である小説家を批評することはできないのが実情だ」。この記事によってパディージャは作品を発表する場を制限されることになった。なぜなら、当時すでに「革命の裏切り者」と見なされていた、キューバ人作家のひとりカブレラ・インファンテの作品を公然と賞賛していたからである。

カブレラ・インファンテは、革命当初は革命側につき、全国文化審議会委員長、『レボリューション (Revolución)』紙 (『グランマ (Granma)』紙の前身) 副編集長兼文学特集『革命の月曜日』担当を歴任した。しかし、その後1960年末にオルランド・ヒメネス・リアル (1941~) と弟のサバ・カブレラ・インファンテ (1933~2002) が作成したハバナの青年グループを扱った短編映画『P. M.』が、1961年にカストロによって検閲され、『革命の月曜日』紙上でも議論となったが、革命指導部によって同紙が廃止されたこともあり、体制と距離を置くようになった。同年6月30日にカストロが行った演説『知識人への言葉 (Palabras a los Intelectuales)』は日和見的な姿勢をもつ知識人に対する最初の批判となった。

1962年にカブレラ・インファンテは在ベルギー大使館文化担当官として赴任し、1965年まで家族とともにブリュッセルに居住したが、母の死去に伴って帰国した際に情報局に逮捕されて4か月拘留された後、国外に亡命した。『三匹の淋しい虎』は、カブレラ・インファンテがブリュッセル在勤中に執筆した作品であり、原作の『熱帯での夜明けの風景 (Vista del Amanecer en el Trópico)』を改編した作品『彼女はボレーロを歌った (Ella Cantaba Voleros)』を改題したものであった。1964年に、リサンドロ・オテロと同様に、スペインのセイス・バラール社のブレーベ図書賞に応募した。作品は、1958年当時

のハバナの青年3名の放埒な夜の生活を扱ったものであった。そのため、キューバ国内ではカブレラ・インファンテは「反革命」の誹りを受け、UNEACから「裏切り者」と非難されて追放された⁽³⁾。

このようなカブレラ・インファンテと彼の作品『三匹の淋しい虎』に関して、パディージャは、次のように述べて擁護した。

「この作品は疑いなく、これまでに書かれた最も輝かしく、最も創意に富んだ、最も深くキューバ的な小説の一つである。(中略)(カブレラ・インファンテは)これまでキューバ革命に反することを一行も書いてはおらず、1961年の精神性で彼に対する突発的な報告を作成した、熱心で匿名の警察以上に、我が国の現実を表現しただけである。」[Padilla 1998:91-92]

パディージャの評論は、出版から1週間以内で発行部数5000部のすべてを売りつくすほどに売れたリサンドロ・オテロの『ウルビーノの熱情』に関して『髭を生やした鱈』誌がアンケート調査を行ったことに対する返答として書かれた。これに対して、『髭を生やした鱈』誌は、「パディージャの返答は要求に合ったものではない」として、パディージャの返答に対して反論を掲載した。同誌編集部は、「パディージャがカブレラ・インファンテに質問すべきであったのは、なぜ現在ロンドンの地下室に住んでおり、他の革命キューバの作家たちが行っているように、国のため、自国の読者のために執筆しながら、ベダードには住んでいないのか、という点である」と、カブレラ・インファンテの体制離反を批判した上で、パディージャをも批判した[Padilla:95-96]。この『髭を生やした鱈』編集部の姿勢を共産主義青年連盟(UJC)が支持した。

このような経緯を経て、翌1968年10月に開催されたフリアン・デル・カサル詩賞審査委員会が、『『ゲームの外で』は、その質で際立っており、表現力において完全さを有する詩人の存在を示している。(中略)我々はこの本の中に、内容的にも現代の基本的な諸問題に関する厳しい視点と、歴史を前にした批判的態度を見出すことができる」との好意的なコメントを付して、パディージャの『ゲームの外で』の授与を決定した。

しかし、同年11月10日付けの革命軍機関誌『ベルデ・オリボ(Verde Olivo)』誌は直ちにレオポルド・アピラ名の「パディージャの挑発」と題する論稿を掲載してパディージャの授賞を非難した。アピラは、『ゲームの外に』に含まれた一部の詩から「私の手は、革命の中に沈み、恨みなく書き綴る」、
「民衆の愛のために、目覚めろ。正当な人間的な時間が始まる」という2か所を引用した上で、「一部の頁には疑いなく評価すべき詩的水準を示しているが、本全体ではない。また他の詩は、パディージャは制作に9年を要したとはいえ、怠惰で、繰り返し、使い古しに過ぎない」と批判的に評した。さらに、「パディージャは、長くにわたって革命に対する攻撃を準備した。助言を聞かず、犯罪的活動に入ることで、多少とも鋭い詩人であることを越えた活動を行った。数か月前から機会を、自分の例をスキャンダルにするために革命に対して挑発を求めた。(中略)帝国主義に対する闘争において、彼は世界の敵と同盟することを選択した」との厳しい論評で締めくくった[Padilla 1998:109-113]。

このような革命指導部に近い立場から批判が出たことを考慮して、UNEACは11月15日付け声明を発表して次のように弁明した。10月28日にUNEACと審査委員会が合同会議を開催した上で、パディージャとともに、体制の優等生そのものであった劇作家アントン・アルーフア(1935～)のUNEAC戯曲賞受賞作『テーベに背いた7人(Los Siete Contra Tebes)』もまた反革命的であるとして批判し、両者に対して、①両者の受賞作は出版する、②UNEAC指導部が両者の著作にノートを付して、イデオロギー的に革命に反対するものであるため、著作と同意できない旨を記す、③両者の作品に関する審査委員会の見解を、UNEAC指導部と審査委員会の幾人かの委員との間に存在した不同意の表現として挿入するという3点を決定した。[Padilla 1998:115]

この声明はパディージャに関して、次のように記述していた。

「UNEAC指導部は両者の作品である詩と戯曲が受賞したことに不同意を表明する。(中略)UNEAC

第5回文学審査会は、真に深遠なあらゆる社会革命に存在するイデオロギー闘争の典型的な現象が我が国に到達している時期に開催された。(中略) 詩部門の受賞作は、その『ゲームの外で』というタイトルからも、著者がキューバの現実から自己排除していることを明白に示している。パディージャは、その詩の中に、そのディスクールを他の許容範囲に位置づけることを意図する曖昧さを残している。」

[Padilla 1998:116]

「この曖昧さの他に、著者は二つの基本的態度を示した。一つは批評家的であることであり、もう一つは反歴史的であることである。批評家的であることは革命を特徴づける積極的な関与ではない一定の距離から行使される。(中略) 反歴史的であることは、時間観念を、上昇する線としてではなく繰り返される円環として表現しながら、歴史的発展にある国民の集団的な要求に対して個人主義を高揚させることを通じて表現されている。」 [Padilla 1998:117]

「著者は、懐疑論であろうと批判的拒否であろうと、資本主義における自由主義知識人に典型的な態度の機械的な移植を行っている。しかし、移植を行う際に、大衆文化の非人間性に対して、消費社会の物象化に対して反対する、この正直で反逆的な知識人は、熱烈な革命的発展の中にその態度を維持し、客観的には反革命に転じる。」 [Padilla 1998:118]

「キューバ革命は、批判を排除することも、護教的な歌を歌うことを強要することを提案するものでもない。また、知識人が批判なき合唱隊であれと意図するものでもない。革命の業績は、歴史を前に革命のよりよき防衛者であるが、しかし社会に批判的に位置する知識人は、道徳的に革命の建設にも貢献することを義務づけられていることを知らなければならない。現代社会を分析的に焦点とする場合、現代の諸問題は抽象的なものではなく、名を持ち、極めて具体的に位置づけられていることを考慮しなければならない。何に対して闘わねばならないのか、何の名において闘わねばならないのか定義しなければならない。」 [Padilla 1998:118]

「パディージャは、空想と変装の行使において、祖国が帝国主義に対してという困難な時期に祖国からの明らかな不在と、存在しない個人的な戦闘性を正当化しようとしている。階級闘争の弁証法を性別間の闘争に転換し、寛大さと開放性に特徴づけられる我が国の革命のような革命の中で迫害や抑圧的雰囲気をつくりだしている。また、革命的なものと同様に非効率さや不器用さを同一視している。国から脱出する反革命者や民衆に対する犯罪で銃殺された者たちと同調している。」 [Padilla 1998:119]

パディージャは、UNEAC 指導部によって、革命的意欲の欠如、その批評哲学、その歴史的軽視の姿勢、社会的必要性に対する個人主義の擁護、および革命の建設における道徳上の義務についての意識の欠落を非難された。UNEAC 指導部は、パディージャが革命建設のプロセスの中でキューバが直面している諸問題を克服していく使命感を共有しておらず、本来革命プロセスの中で知識人が果たすべき役割を十分に認識せず、資本主義社会における自由主義派の知識人のような振り舞いをしており、このような姿勢は「反革命的」と考えたのである。UNEAC 指導部、即ちキューバ革命の指導部は、作家、詩人などの知識人は、書きたいことを書いておればよいということではなく、その歴史的使命を全うすべきであるとの立場からパディージャを批判したと言える。その意味合いにおいて、パディージャに対する批判は、1967年にカブレラ・インファンテをパディージャが擁護したことに対する批判を含めて、革命プロセスが進行している国における知識人のあり方に関する根底的な問題を含んでいた。

『ゲームの外で』には、確かに革命プロセスの進展ぶりから見て不都合と思われる記述が何か所か存在した。例えば、つぎのような部分である。

piensas que será suficiente la astucia o el buen juicio
para evitar que un día, al entrar en tu casa,
sólo encuentres un sillón destruido, con un montón
de libros rotos,

yo te aconsejo que corras enseguida,
que busques un pasaporte,
alguna contraseña,

「君はずる賢さあるいはよき判断が十分であろうと考える。

ある日君の家に入った時に
破壊された椅子を、たくさんの
破かれた本とともに見出すことを避けるために、
君に直ちに逃げ出すよう、
旅券をさがすよう
何か合言葉をさがすよう助言する」

Di la verdad,

Di, al menos, tu verdad.

Y después

deja que cualquier cosa ocurra;
que te rompan la página querida,
que te tumben a pedradas la puerta,
que la gente
se amontone delante de tu cuerpo
como si fueras
un prodigio o un muerto.

「真実を言いなさい、

少なくとも、君の真実を。
そして、後に
あらゆることが起こるに任せなさい、
大好きな頁が破られるに任せなさい、
戸口のドアが投石で壊されるに任せなさい、
人々が、
君の体の前に群集するように、
まるで君が神童か死者であるかのように」

¡Al poeta, despidanlo!

Ese no tiene aquí nada que hacer.

No entra en el juego.

No se entusiasma.

No pone en claro su mensaje.

No repara siquiera en los milagros.

Se pasa el día entero cavilando.

Encuentra siempre algo que objetar.

「詩人を解雇せよ！

それはここではなすべくもない
ゲームの中に入るな。
熱狂しないように。
メッセージを明確にしないように。

奇跡においてさえ気づかないように。
一日中思い悩みながら、
常に反対すべき何かを見つけなさい。」

「パディージャ事件」の発生後、スペイン・ラテンアメリカのスペイン語圏諸国の作家たちの中にはキューバ指導部によるパディージャに対する処置に反対する姿勢を示す決意をした者たちが現れた。スペインのファン・ゴイティソロ（1931～）は「カルロス・フランキの助言によって、私はコルタサル（1914～1984）、フエンテス（1928～2012）、バルガス・ジョサ（1936～）、ホルヘ・センブラン（1923～）、そしてガルシア・マルケスと接触し、ガリマール書店の中にあったウグネ・カルベリス（コルタサルの2番目の妻）のオフィスから、エベルトと電話で連絡を取ろうとした。彼の番号に何度電話をかけても通じないので、われわれ全員の名前が入った電報をアイデー・アンタマリア（1923～1980）に送ることにし、その中で詩人に対する“中傷に満ちた告発に落胆している”ことを明らかにした後、『知的自由のためにカサ・デ・ラス・アメリカスが企図するあらゆる活動』をわれわれは支持することを表明した。2日後に届いたアイデーの電報による返事にわれわれは仰天してしまった」と述べている。カサ・デ・ラス・アメリカスの長官であるアイデー・サンタマリアは、「はるか彼方から、パディージャに対する告発が中傷に満ちているかいないかが分かるとは不可解です。カサ・デ・ラス・アメリカスの文化路線は私たちの革命、キューバ革命の路線です。チェが望んだ通り、常に銃を構え、周囲に大砲を放つのです」と彼らを批判したと言う。こうして、1959年のキューバ革命成立以来、キューバ革命を擁護してきたラテンアメリカの作家・知識人とキューバ革命政権との間の摩擦が生じ始めることになった。しかし、「パディージャ事件」はこの1968年の出来事だけに留まらず、1971年にさらに大きな形で再燃することになる。

1968年末にはまだ、欧米やラテンアメリカ諸国の進歩的知識人の中には、キューバにおける文化人・知識人への対策に対する批判の波浪は高まっていたとはいなかった。同年12月にハバナで文化人会議が開催されたが、その際米国からは『ザ・ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』編集長のロバート・シルバース（1929～）、作家のルス・ロスチャイルド、スーザン・ソントグ（1933～2004）とその息子のデイビッド・リーフ、ドイツからはハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー（1929～）、アルゼンチンのフリオ・コレタサルなどが参加し、体制側が最も危険視していたレサマ・リマとの私的会合を持つこともできる環境はまだ存在していた [Padilla 1990:171-173]。

(2) 1971年：「パディージャ事件」の再燃

「パディージャ事件」が再燃し、本格化する契機となったのは、1970年11月にチリにアジェンデ人民連合政権が誕生し、チリとキューバの間に外交関係が樹立され、初代の臨時代理大使としてキャリア外交官であると同時に作家でもあるホルヘ・エドワーズ（1931～）が1970年12月7日に赴任してきたことであった [Padilla 1998:133]。エドワーズは、本人自身は左翼的で、1960年代には常にキューバ革命を擁護する姿勢をとったが、他方でチリの保守系の『エル・メルクリオ (El Mercurio)』紙の社主であるエドワーズ家の遠戚でもあったため、キューバ政府からその左翼的姿勢が疑問視されていた。エドワーズに対するキューバ政府の警戒心が強まったのは、1968年初頭にエドワーズが在仏大使館在勤中にUNEACから招待されてキューバを初めて訪問し、その後同年に実施されたUNEAC文学賞の審査委員に選ばれ、受賞作としてノルベルト・フエンテスの作品『Condenados de Condado』を推薦したことが契機となった。その後、エドワーズはフエンテスの他、パディージャ、レサマ・リマ等キューバ政府から警戒されていた体制批判的な知識人・文学者との交流を続けたことから、キューバ国内に反体制派を形成することを目的としたCIAエージェントであると見られるようになった。また、チリにおいてアジェンデ人民連合政権の登場をもたらした1970年9月4日に実施された大統領選挙のキャンペー

ンの中で、保守系の『エル・メルクリオ』紙が国民党候補のアレサンドリを支援して、反アジェンデ・反人民連合のキャンペーンを大々的に行ったという事実もホルヘ・エドワーズに対する評価を悪化させたことも考えられる。

そのエドワーズがアジェンデ人民連合政権の初代臨時代理大使として赴任したことは、キューバ政府を警戒させることになり、エドワーズとキューバの知識人・文学者との接触が国家公安局によって監視された。そのような時期に、パディージャが執筆した『英雄たちが私の庭の草を食う (En Mi Jardín Pastan Los Héroes)』が国家公安局の批判を受けており、その内容が3月20日のパディージャ逮捕の直接の口実とされた。公安当局側は、フィデル・カストロのニックネームが「馬」であったことから、パディージャの作品はカストロをあてこすって批判することを目的としているとこじつけた [Padilla 1990:141]。パディージャはその作品のキューバ国内での出版は困難であると考え、エドワーズが関与しているバルセロナのセイス・バラル社に出版の可能性を打診してもらうためにコピーをエドワーズに渡したことが、反革命的行為として告発される直接の原因となったようである (作品は1980年のパディージャの出国後に国外で出版された)。

3月20日にパディージャが逮捕され、その2日後にエドワーズは「ペルソナ・ノン・グラタ」としてキューバ政府によって国外追放処分に処せられることになる。国外追放の前日の夜にカストロがエドワーズを訪問して3時間ほど懇談したが、カストロはエドワーズを通じてCIAがキューバ国内の体制批判的な知識人を組織化しているとの見方を示し、「ペルソナ・ノン・グラタ」として国外追放すると告げた [Edwards 1973:227-231]。エドワーズはその後もアジェンデ政権下で外交官として勤務し、在仏大使館に再赴任したが、ピノチェ將軍のクーデター後に外交官を辞任してバルセロナに居住してセイス・バラル社に勤務した。その後1978年にチリに帰国し、民政移管後は1994~96年にユネスコ大使、2010年には駐仏大使に任命されている。

前述の通り、同年3月20日、パディージャとその妻で詩人のベルキス・クサ・マレー (1942~) が国家公安局によって逮捕された。ベルキス・クサ・マレーはわずか2日で釈放されたが、パディージャは4月27日まで5週間にもわたって拘留された。

4月2日、メキシコ・ペンクラブがサルバドル・エリソンド (1932~2006)、カルロス・フエンテス (1928~2012)、オクタビオ・パス (1914~1998)、ホセ・レブエルタス (1914~1976)、ヘスス・シルバ・エルソグ (1892~1985)、ファン・ルルフォ (1917~1986) 等19名のメンバー連名の抗議書をカストロ首相宛に送り、「メキシコ・ペンクラブのメンバーであり、自立も求めるキューバ国民の闘いの共鳴者であるここに署名する作家たちは、詩人エベルト・パディージャの逮捕を遺憾とし、貴首相が本件に関して出されたAF通信が伝えている声明を遺憾に存じます。我々の共通の見識は、知的批判の権利はキューバにおいても、他の国においても同様であることを肯定しています。我々は、エベルト・パディージャの釈放は抑圧的で反民主主義的な行動を通じて、キューバの芸術と文学の偉大な発展を終わらせないために基本的なことであると思います。」 [Padilla 1998:122]

さらに抗議の動きはスペイン語圏諸国や一部欧州諸国にも広がった。『絆と権力 ガルシア・マルケスとカストロ』の著者であるエステバンとパニチェリは次のように書いている。

「詩人の逮捕は、とりわけそのときまでカストロの革命を支持してきた知識人の間に、多くの反発と抗議を引き起こした。そしてたちまちキューバのスターリン主義化が差し迫っているという噂が広まった。かなり数の作家がそのとき革命との繋がりや支持を永遠に断ち切ったが、その中にはバルガス・ジョサ、ファン・ゴイティソロ、フエンテス、プリニオ・アプレヨ・メンドサ、オクタビオ・パス、サルトルらがいた。そして当然ながら革命家カルロス・フランキの名もあった」 [Esteban 2010:49]。

4月9日にコルタサル、フランキ、フエンテス、ゴイティソロ (1931~)、オクタビオ・パス、ガルシア・マルケス、バルガス・ジョサ (1936~)、ジャン・ポール・サルトル (1905~1980)、シモーヌ・

ド・ポーワール（1908～1986）等 33 名が署名した抗議書（第 1 抗議書）がカストロ首相宛に送られた。その抗議書には、次のように記されていた。

「ここに署名した者たちは、キューバ革命の諸原則と目的と連帯するものであり、詩人であり作家であるエベルト・パディージャが拘留されたことに対する我々の懸念を表明するとともに、彼の逮捕がもたらした状況を見なおすよう要請するために本書簡をお送りします。

この逮捕に関して、現時点までキューバ政府が如何なる情報も提供していないため、チェ・ゲバラが様々な機会に革命の中における批判の権利の抑圧を告発した際に言及した、1962 年 3 月に貴首相によって発せられた以上の暴力的で危険に満ちたセクト的傾向が再登場することを恐れています。

チリにおいて社会主義政権が登場し、ペルーとボリビアにおいて生じた新しい状況が米帝国主義によってキューバに対して課せられた犯罪的な封鎖の解除を祝しているこの瞬間に、革命の中における批判の権利をこうした知識人や作家に対する抑圧的措置の使用は、キューバ革命が象徴であり基準であった全世界の反帝国主義勢力の間に、特にラテンアメリカにおいて、真に否定的な影響をもつものです。

我々の要望にお答えいただくことに感謝するに際し、シエラ・マエストラでの闘争が鼓舞し、貴首相、チェ・ゲバラ司令官、他の革命指導者たちの言葉と行動を通じて何回となくキューバ革命政府が表現してきた諸原則との連帯を再確認いたします。」[Padilla 1998:123-124]

4 月 27 日、パディージャは釈放されたが、その夜パディージャが UNEAC の会合において自己批判を行い、そのテキストが『カサ・デ・ラス・アメリカス (Casa de la Americas)』第 65・66 号に掲載され、国内に出回り始める。この会合には、ビルヒリオ・ピニェラ（1912～1979）、アントン・アルーフア（不詳）、ロベルト・フェルナンデス・レタマル（1930～）、レイナルド・アレナス（1943～1990）等が招待されて出席した。パディージャは、この会合での発言において、自らのそれまでの姿勢を自己批判するとともに、同僚の作家たちをも批判して、次のように述べた。

「私は国家公安局において何日も反省する時間をもった。私はあなた方の多くが驚くかも知れない私の態度に関して幾つかの点についてお話する。多くの方々は、私が公に認識する能力があると信じていることができるだろう。私は数多くの過ちを、まさに許し難い過ちを、まさに非難されるべき、まさに言語道断な過ちを犯しました。しかし、このたびの経験の後で、再出発を望みつつわが人生をやり直すことができることになったため、真に心が軽く感じられ、真に幸福な気分を味わっています。この会議は私が要請しました。（中略）私はキューバ人そして外国人と手を組んで、革命を誹謗し、革命を絶えず侮辱してきました。私は自らの過ち、自らの反革命的活動によって、はるか遠い地点に達してしまいました。（中略）すなわち、反革命分子というのは革命に背いて活動し、革命を傷つける者のことです。そして私は、革命に背いて活動し、革命を傷つけたのです。これが私の真実であり、これが私の大きさであり、これが真に私であった人間であり、これがこれらの誤りを犯した人間であり、これが客観的には革命の利益のためではなく革命に反して働いてきた人間である、と言わなければならなかった。（中略）私は、私自身がありたいと望んだように、革命的作家、批判的作家になりたかったと思う。私の個人的な意見、友人たちと共有できるような意見は、私が公に持たねばならない意見と同じ重さを持たなければならなかった。」[Padilla 1998:127]

パディージャは、リサンドロ・オテロの『ウルビーノの情熱』を批判し、一方でカブレラ・インファントの『三匹の淋しい虎』を擁護したことも自己批判した。

「1966 年にヨーロッパからキューバに戻った時、この帰国は恨みの印であったと形容することができる。キューバに帰国してまず最初に行ったことは、何ヶ月か後に、リサンドロ・オテロの『ウルビーノの情熱』の出版に際して、リサンドロ・オテロのような長年の真の友人に対して、冷たくまた不当に攻撃するために、文学別紙の『髭を生やした鱷』が私に提供した機会を利用することであった。リサンドロは、私のヨーロッパからの帰国に際して、私が役所によって与えられた 2 ヶ月間の休暇のうち 1 ヶ月

を過ごすために海岸の別荘を提供してくれた。最初に私が行ったことはこのリサンドロを攻撃することであった。リサンドロに恐るべきことを言ってしまった。そして、私が誰を擁護したのだろうか。私はギジェルモ・カブレラ・インファンテを擁護してしまった。我々すべてが知っている、ギジェルモ・カブレラ・インファンテとは誰であったのだろうか。ギジェルモ・カブレラ・インファンテとは誰であったのだろうか。ギジェルモ・カブレラ・インファンテは、革命側の人ではなく、常に崩壊した者、とりわけ社会的に崩壊した者、慎ましい下層階層の人間、貧乏人、なぜ彼が青年期から人生に嫌気がさしたかについて私は理解できない人間、最初から革命と妥協できない人間であった。そして、私もギジェルモ・カブレラ・インファンテのこれらの諸特徴に遠くなかった。私が最初に行ったことは、革命の敵、CIAのエージェントと宣言されたギジェルモを、リサンドロ・オテロに対して擁護することであった。なぜだったのか。芸術的価値の名で擁護するために。ギジェルモ・カブレラ・インファンテの小説『三匹の淋しい虎』に、どのような素晴らしき、非常にすばらしき芸術的価値を与えることができるのか。どんな例外的な価値が、『髭を生やした鰐』が長年の友人を攻撃するために私に提供した機会を利用するに値するどのような例外的な貢献を、その本はできるのだろうか。私は専門的な批評家ではなかった。政治的なものと文学的なものとの間の特別な違いを確立することは私の義務ではなかった。」[Padilla 1998:128-129]

そして、パディージャは『髭を生やした鰐』の要請に応じて書いたコメントの中で革命を攻撃したと自己批判した。

「『髭を生やした鰐』のために私が書いた有毒な小さなコメントにおいて、私は3つの革命組織を攻撃した。例えば、私は自分が属する組織である UNEAC を目立ちたがり屋の殻であると攻撃した。私は、彼自身が明らかに示したように、彼自身が宣言することに努力したように、ブリュッセルに3年間いて革命の敵と結合したギジェルモ・カブレラ・インファンテのような反革命家を執務から切り離したことで外務省を攻撃した。さらに私は、ギジェルモ・カブレラ・インファンテの活動に関して報告した国家公安局の一同志を、文学的スタイルについて話しながら、あたかも文学的スタイルが真実と関係しているかのように、あるいは真実が文学的スタイルより重要でないかのように、攻撃した。」[Padilla 1998:129]

さらにパディージャは、彼との連帯を表明した国際的な文化人・知識人を批判して、次のように、資本主義諸国の知識人に典型的な姿勢であると批判している。

「私を支援したこれらの知識人たち、私と国際的に連帯したこれらの知識人たちは、近年の私の生き方を根本的には知らない。彼らの多くは、私がそれらの態度をとった事実を、私がなぜそれらの態度をとったのか、なぜ私があるような姿勢をとったのか知らない。それは、資本主義世界の作家たち、私はこれらの同志たちが革命の謙虚さに気付いたときに、私がある方と自由に話すことができていることを見たときに、当然の態度である。もしこれらが私の思想であったならば、私に要求すべき第一のことは、明日にさえ監獄に戻らなければならないとしても、何が真に私の思想であるべきかを言うべきこの瞬間の勇気であろう。」

パディージャはこのように自己批判をした後、自分と同じ過ちを犯した者を告発したが、その中には、彼自身の妻ベルキス・クサ・マレー（1942～）や友人であったノルベルト・フエンテス、パブロ・アルマンド・フェルナンデス（1929～）、セサル・ロペス、ホセ・ヤネス（1944～）、マヌエル・ディアス・マルティネス（1936～）、ビルヒリオ・ピニェラ（1912～1979）、ホセ・レサマ・リマの名があった。

「もし私が今ここで立ち上がるならば、私と同じような状況への道を歩んでいる同志たちの多くの名前を示すならば、逮捕されなかったとしても逮捕されないとしても、彼らは私が真実を述べていることを知っている故に、また、私がそうであった以上にもっと革命的であると感じなければならない故に、それらの同志たちは私に反論することはできないであろうと確信している。」

(イ) ベルキス・クサ・マレーについて

パディージャは妻ベルキスについて次のように言及した。

「何故なら、例えばもし、このことで多く苦しんできた、妻であるベルキスの名前に言及するなら、どれだけの不快、嫌悪、怨恨を近年彼女が不可解にも蓄積してきたか、一連の私の欠点が彼女を苦しめたが、彼女は立ち上がって、私を否定することはできないだろう。」 [Padilla 1998:144]

ベルキスはその後、1979年にパディージャに先立って息子とともに出国し、パディージャは1980年に出国を許可された。二人は、1986年にテキサス州フォート・ワースにキューバ文化センターとキューバ芸術ギャラリーである「カサ・アスル（青い家）」を設立し、2000年のパディージャの死後「青い家」は「エベルト・パディージャ」と名付けられた。ベルキスは今もフォート・ワースに在住している。

(ロ) パブロ・アルマンド・フェルナンデスについて

パディージャは、フェルナンデスに関して次のように述べた。

「同じことが一人の長年の友人、近年家庭的な暖かさを私に与えてくれた一人の友人であり、他の時期には革命のために多くの積極的なことを行ってきたが、近年は不快、嫌悪、病気、寂しさ、反革命的なことを示してきたパブロ・アルマンド・フェルナンデスに関して言うことができる。」 [Padilla 1998:144]

フェルナンデスは、1966年にカサ・デ・ラス・アメリカス詩賞の審査員を務め、1968年には同小説賞を『子供たちはお別れする (Los Niños Se Despiden)』で受賞し、1971年4月のパディージャによる批判後もキューバに残り、1985年にはカナリアス諸島で開催された第1回スペイン語国際会合に参加し、1992年にはセルバンテス賞の審査員となり、また1996年にはキューバ国民文学賞を受賞し、2008年にはラテンアメリカの詩を特集したトルコで開催された第4回エスミルナ国際フェスティバルに他のラテンアメリカの詩人とともに参加するなどキューバを代表する文学者として活躍した。

(ハ) セサル・ロペスについて

パディージャはセサル・ロペスについては次のように述べた。

「同様のことが、私は尊敬し、尊重するもう一人の親愛な友人であり、カサ・デ・ラス・アメリカスにおいて言及された、美しく、好ましく、尊重されるべき本である『その都市の最初の本 (El Primer Libro de la Ciudad)』を書いたセサル・ロペスについても言える。セサル・ロペスは、私と一緒に、キューバ革命に関して敗北主義的で否定的な分析を行った。セサル・ロペスは詩に敗北の時期をもたらした。」 [Padilla 1998:144]

(ニ) ホセ・ヤネスについて

ヤネスについてパディージャは次のように述べた。

「例えば私は、私が愛情を感じる、また私に反論はできないことを知っているホセ・ヤネスの名に言及する。彼が2年前に書いた詩と最近の詩がいかに異なるかを考えた。彼はその断腸の思いに満ちた詩をキューバから米国に行ってしまった母親に捧げた詩人である。ホセ・ヤネスは、その年齢と時代にふさわしくない詩と、敗北主義的な詩と、セサルの詩とも似た、私の詩とも似た詩ともに再び現れる。」 [Padilla 1998:145]

ヤネスは、1966年にフアリアン・デル・カサル国民文学賞を著書『語ること (Hablar)』にて受賞、1968年にこの著書をUNEACから出版、パディージャによる批判後は1998年に国外脱出して、その後はハワイに居住している。

(ホ) ノルベルト・フエンテスについて

パディージャはフエンテスについて次のように述べた。

「私はもう一人の例外的な才能を有する若者について考える。私が好み、私の影響を受けているといつも言っていた若者である。(中略) 私はノルベルトについて考える。ノルベルトは素晴らしい知的・

政治的経験を持っている。(中略)彼は長年国家公安局と緊密に生きてきたし、国家公安局は彼に絶対的な信頼を置いてきた。国家公安局は、識字運動活動家や農民家族を殺害した反革命分子と闘った兵士たちの英雄叙事詩をつくるように彼に報告書を提供した。その上で、私が持っていない素晴らしい経験を持っている革命時の日常の実践において、こんなにノルベルトと私が一致していることは正当ではありえないと私は言っていた。もしノルベルトと話すことができるならこの瞬間にでも彼に会いに行けるのと言ってきた。」

「私は、革命が我々を破壊しつくすために、彼と対決する、われわれと対決するための特別の機械装置を建設したことは知らなかった。私の逮捕の一日前に、国家公安局がわれわれを破棄しつくす人々として現れるテーマに関していつものように話しながら、彼と一緒にいたことを覚えている。私は完全にノルベルトがここに立ち止まったことを知っている。(中略)さらに私は、彼は美しい文学的な作品をつくることができることを知っているし、私は彼が私を否定しないことを知っている。何故なら私は、彼がそのようにできないことを、誠実ではないことを、革命的ではないことを知っている。われわれが議論しなければ、何度もお互いに出していた正当化を見出すことはできないだろう。われわれは中央委員会がわれわれと話すためにわれわれを呼び出さなければならないといいながら、われわれを正当化することは到底できないだろう。もしわれわれが革命家であったならば、責任ももってそこに立っていなければならないと感じるだろう。彼はキューバのジャーナリズムに多くの有用な貢献をなしてきた。さらにキューバ文学に対して美しい作品を与えてきたし、与え続けるだろう。」

「受け入れられない彼の最新の小説、彼が心配している小説、まだ自分の形をその中に見出し得ないと彼が言っている小説について話し合った。これは何らかの形で問題を再提起しなければならないと言う所属組織の深い返事であり、道徳的要求であろうか、私はそうだと考えた。同志たち、革命はこのような事態に寛容であることはできないと私は理解している。あらゆる意味のないお喋りの空理空論を何日も議論し話し合い、討議してきた。しかし、私の山積みされた過ちは価値を持っているし、われわれ一人ひとりのために模範的な価値を持たねばならない。」 [Padilla 1998:146-147]

フエンテスは、パディージャによる批判後も、批判された他の作家たちとは違って自己批判を行わなかった唯一の作家として姿勢を貫徹した。1984年には邦訳もある『キューバのヘミングウェイ (Hemingway en Cuba)』を出版、1987年には『アーネスト・ヘミングウェイ：再発見 (Ernest Hemingway: Rediscovered)』を出版したが、1989年に発生したオチョア事件に際してカストロ体制がオチョア将軍らを有罪として銃殺に処したことに對する違和感からカストロ指導部とは距離を置くようになった。1993年に海上脱出を試みたが失敗し、1994年にガルシア・マルケスなどの介入によって出国して、その後も積極的な執筆活動を続けている。1999年には『最後の聖地 (El Último Santuario)』、2002年には『麻薬密売と革命的任務 (Narcotráfico y Tareas Revolucionarias)』、2004年と2007年にはカストロの伝記である『カストロ伝記第1巻：他者の天国 (La Autobiografía de Fidel Castro I: El Paraíso de los Otros)』、『第2巻：絶対的だが不十分な権力 (II: El Poder Absoluto e Insuficiente)』を出版してカストロ批判を展開している。

(ハ) マヌエル・ディアス・マルティネスについて

ディアス・マルティネスに関するパディージャの言及は次の通りであった。

「私は、マヌエル・ディアス・マルティネスについて考え、彼を思い出していた。多くの若者たちが政治的に無関心であったとき、マヌエル・ディアス・マルティネスは確信に満ちた急進的な闘士であった。私は大いに尊敬し、私がその友好関係に負い、感謝しなければならないほどの連帯の証しを示してくれたマヌエル・ディアス・マルティネスが、悲しむべき、痛烈な反体制的な態度をとることがどうして可能なのだろうか。この私の経験はすべての人たちに例として役立つものであると知っている。」

[Padilla 1998:147-148]

ディアス・マルティネスは、1967年に『生きるとはそのこと (Vivir es Eso)』でフリアン・デ・カサル詩賞を受賞、外交官として勤務する一方で文学活動を続け、1994年には『その冬のための記憶 (Memorias para el Invierno)』でラス・パルマス市賞を受賞、2005年には詩作品『Paso a Nivel』をマドリッドで出版、詩集『歩む蝸牛 (Un Caracol en su Camino)』をカデイスで出版するなどスペイン語圏で活躍している。

(ト) ホセ・レサマ・リマについて

レサマ・リマについてパディージャは次のように述べた。

「ここに来ているかは知らないが、私は単純な理由からレサマ・リマについて言及できる。キューバ革命はレサマについて公平であった。体制は本年も彼の著書を2冊出版した。しかし、レサマの判断はいつも革命に対して公平ではなかった。これらの判断、これらの態度これらの活動はよく知られている、あらゆる場所で知られている、国家公安局においても知られている。私は何も新しい事実を、特に国家公安局に知らせているわけではない。国家公安局はレサマのそれらの態度を知っている。キューバ人の間に外国人の間に意見はすべて、革命を中傷する書籍の分析を編成する観点を成している。レサマは公平ではない、私との会話において、私の前で外国人と行った会話において、公平ではなかった。革命について公平ではなかった。今私は認めるためにここに来ることができると確信している。何故ならレサマは、とても誠実な人間であり、強制する能力を持つ人間であるからである。レサマは、私の言っていることが道理であると言うためにここに来ることができただろう。ただ一つの正当化は行動を矯正することである。その原則がマルクス・レーニン主義である革命が、革命がもつ寛大な理解の基準なしに、他の政治的・哲学的概念に、他の利益に依拠するようなレサマの作品のような作品を出版するというのをどうして説明できるだろうか。」 [Padilla 1998:148]

パディージャはレサマ・リマをこのように批判したが、1966年に出版されたレサマ・リマの小説『楽園 (Paradiso)』はスペイン語圏をはじめ国際的にも高く評価された。しかし、レサマ・リマは同性愛的傾向から革命政権からは冷遇され、「パディージャ事件」後はUNEACの役員職からも排除され、1976年に死去した⁽⁴⁾。

このようにパディージャによって批判された作家・詩人たちは、その後体制との違和感から出国・亡命する者が出る一方で、キューバに残る選択肢を取る者に分かれることになる。

パディージャは、前述のようなこれらの妻や友人たちに対する批判をした上で、次のように総括して締めくくっている。

「同志たちよ、私はこれを終えるために真剣でなければならない。例外はあるだろうが、革命の後ろに、政治的に革命に牽引されている一部門があるとすれば、それは文化と芸術の部門であるという結論に達したことを私は告げなければならない。われわれが生きてきたこの緊張した12年から13年であったにも拘らず、われわれは革命のこのような状態にはいなかった。一時にせよ、キューバ革命が達成してきた諸課題について再考してみよう。例えば、サトウキビ刈りについて。どれほどの刈り取りに作家たちが参加しただろうか。ほとんどなかった。(中略)これがわれわれが直面している状況である。(中略)要求するために、陰口をきくために、抗議するために、批判するために、その最初にいるのが作家たちの多数派である。もしわれわれが真剣に、深く分析するならば、自分自身のあり様をよく見るならば、私を特徴づける、作家たちの多くを特徴づけるエゴイズム、独善、傲慢不遜、思い上がり、基本的な特徴であると見ることができる。それ故に、イデオロギー的にはいつも。団結や共同労働の感覚は少ししかなく、悲観主義、幻滅、敗北主義、即ち反革命と結びつかせるものである。懐疑主義、不和、憎しみ、反体制にだけ団結している。私は、私の過去と未来を分かち機会を与えてくれたキューバ革命に感謝することに飽きることはない。革命は私にとっても寛大であった。革命は私に、仕事を、私の切望にあった、希望に沿った仕事を公正に示してくれた。革命は私に自由だけでなく、仕事を与えてくれた。

私が議論した同志たちと持った対話は信じ難いものであった。対話する、それは言葉の問題ではない。私が話し合った人々は私を尋問することはなく、長く輝かしく驚くべき知的で、政治的な説得であった。」〔Padilla 1998:149-150〕

この UNEAC 主催の自己批判集会においてパディージャが行った表明の真の意図については多くの疑問が存在する。自己批判文を公表することが釈放の条件であったと見られるからである。キューバを含むラテンアメリカの知識人の大半は、自己批判文はパディージャの手で書かれてはいないと見ている。そのひとり、自己批判文の中で批判されているマヌエル・ディアス・マルティネスは、「我らの詩人は、『神曲』の書き手でないのと同じ程度にこの手紙の書き手ではない」と述べている。

自己批判文はおそらくはパディージャ自身が書いたのであろう。ただし脅されながらである。というのも、そうした脅かしの方法は、キューバ革命の政治的抑圧システムにおいては一般化しつつあったと見られるからである。実際、パディージャに近い友人たちの証言によれば、パディージャはそのテキストであまりに多くの政治的過ちを告白しているが、それが寧ろ彼が書き手であることを疑わせるという。

苦渋と偽りに満ちた自己批判の後、パディージャは釈放された。自己批判文で名前を言及された人々の大半は、自己批判の間に、マイクの前で釈明を行った。そのときの経過についてのディアス・マルティネスは、「パディージャの自己批判はすでに公表されていたけれど、それを読むのと、あの晩あそこで直接聞くのとでは、大きな違いがあった。私はあれを人生最悪の時として記憶に留めた。パディージャが話している間に、私の近くに座っていた人々が見せた呆気にとられた顔を、私は決して忘れないし、ましてやパディージャが、潜在的な革命の敵として彼の友人の名を挙げ始めたとき——私たちのうちの何人もが「生ける屍」になっていた——、老いも若きもいたキューバの知識人たちの顔に浮かんだ恐怖の色を忘れることはない。私はロベルト・ブランリーの真後ろに座っていた。エベルトが私の名を挙げたとき、親友のブランリーはわななきながら私の方を振り向き、まるで私がもう絞首台に連れて行かれるかのように、恐怖に満ちた眼ざしで私を見た」と述べている。

パディージャは、1990年に出版した自伝『他者の自画像 (Self-Portrait of the Other)』において、逮捕から釈放までの39日間について詳述している。同書の中でパディージャは、逮捕のきっかけはエドワーズに『英雄たちが私の庭で草を食う』の原稿コピーを渡したことでであると述べるとともに、身柄拘束中は国家治安局のアルバレス中尉が尋問や誘導にあたったと述べている。しかし、どのように自己批判を誘導されたかについては詳述していないが、尋問の途中であまりのストレスからパディージャが病に倒れて入院した際にカストロが見舞いにやってきて、警護官に席をはずさせて二人だけで話し合う機会を作ったと述べている。その際、カストロは、海外では革命に反対する人びとがいるが、パディージャにはその責任があると言い、知識人たちがキューバのために何か建設的なことをしてくれたことがあるか、彼らはいつも批判し、いつも欠点を探している、もしパディージャにまだ礼儀正しさと愛国心が少しでもあるのなら、それを示すのに遅すぎるということはないと言った。このカストロの言葉にパディージャは、長期刑判決の可能性が大きいことを見通して、カストロの望むことをしようと決め、友人の何人かを巻き添えにしつつ、自分の過ちを長々と告白する準備をする決意をしたようである〔Padilla 1990:149-166〕。パディージャが自己批判をする決意を固めたのは、このように病床を見舞ったカストロとの二人だけの会話をきっかけとしたと考えられる。

UNEAC 主催のパディージャの自己批判集会が開催された前後の4月23~30日に開催された第1回全国教育・文化会議の閉会式に出席したカストロ首相は、30日の閉会式において行った演説の中でパディージャ問題に関して言及したが、この演説のテキストは『カサ・デ・ラス・アメリカス』第65・66号(5・6月号)に掲載されることになる。この演説の中でカストロは、次のように述べた。

「われわれは、経済的帝国主義を、植民地主義にとって代わってきた、とって代わろうとしてきた、もう一つの繊細な植民地化の形態を発見した。それは、われわれが広範囲に発見した文化的植民地主

義、政治的植民地主義である。ここで幾つかの表明があったが、それについて話すことを留めることは意味がない。会議とその合意事項は、それらの傾向を投石器で打ち破るために十分であると信じている。ヨーロッパにおいて、もしあなたがヨーロッパのリベラル派のブルジョア新聞を読めば、ヨーロッパにおいては、彼らにとっては、米国から 90 マイルに位置し、帝国主義の航空機、艦隊、何百万人も兵士に、科学兵器に、生物兵器に、通常兵器に脅かされている一国の問題は、彼らの問題ではない。彼らの国は、われわれを沈没させようとし、あらゆる角度から封鎖しようとする帝国に対する英雄的な戦いを進めている国ではない。彼らの問題は、われわれに困難な条件においてその支えを構築しなければならない低開発国の諸条件を提起するこれらの問題ではない。われわれが対応しなければならない 200 万人以上の児童、若者たち、学生たちの諸問題、本、文房具、鉛筆、衣服、靴、家具、机、黒板、音響教材、チョーク、多くの場合には給食——50 万人もの学校で食事する児童が存在するのだから——教室、校舎を届けなければならない。非現実的な世界に生きるそれらの人々にとって、これらは問題ではなく、これらは存在しないのだ。これらがわれわれの問題ではないと信じるためには、現実に存在する問題を無視するためには、世界の現実から周縁化され、限りなく麻痺し、完全に狂っていなければならない。」 [Padilla 1998:154]

「何人かは私が今夜その問題に言及するだろうと言っていた。しかし、なぜ？ なぜ私がそれらのゴミたちに言及しなければならないのか。なぜ私がこの国の問題ではない問題をこの国の問題のカテゴリーに引き上げなければならないのか。なぜなのか、ブルジョア的なりベラル派の方々は、自分たちの真の深い問題は何かを知っている何百万人の労働者、農民学生、家族、教員たちが意見し、表明することを感ぜないし、触診しようとしめないのか？

知的なゴシップに関係した幾つかのことは、われわれの新聞には現れなかった。それでは、新聞に現れないどのような問題が、どのような危機が、どのような秘密があるのか？ブルジョア的なりベラル派の方々よ、これらの問題は、われわれの労働者の注目を引き、われわれの新聞の頁の注目をひくためには、あまりに重要ではないのだ、あまりにゴミに過ぎないのだ。

われわれの問題は別である。もう歴史が現れるだろう。もう何らかの文学雑誌には小問題が現れるだろう。十分ではないだろうが。怠惰や退屈が、重要な問題のカテゴリーに引き上げるあらゆるコストを求めるそれらの問題を娯楽として、有用な学識として公にすることができる。なぜなら彼らは、帝国主義によって支払われ、骨の髄まで腐敗した、この革命から、キューバのような国々の諸問題から 1000 マイルも離れた反革命的で、ブルジョア的なそれらすべての新聞は、それらが問題であると信じているのだ。そうではない。ブルジョアの方々よ、われわれの問題は低開発の問題である、あなた方が、搾取者たちが、帝国主義者たちが、植民地主義者たちがわれわれに残した遅れからどのように脱却するのか、数世紀ものあいだの略奪である犯罪的な不平等交換の問題からどのように防衛するのか、それらが問題なのだ。」 [Padilla 1998:155]

「彼らはわれわれに対して戦争状態にある、それは結構なことだし素晴らしい。正体が暴かれ、くるぶしまで裸にされるだろう。彼らは、妥協なしに、屈服の兆候もなく、米国から 90 マイルに位置するキューバのような国に対して、パリやロンドンやローマに住みながら月桂樹を得たいと思っている無礼な似非左翼主義者に口実を与えるのに役立つことはない数億人から成る世界の一部を形成する国に対して戦争状態にある。彼らの一部は、無礼な戦闘の砦にいたのではなく、1 万以上の問題から離れて、最初の段階でラテンアメリカの諸問題の幾つかを表明することができた時に獲得したほんの少しの名声を使いながら、ブルジョアのサロンに生きている。しかし、キューバと一緒に、キューバのためには決して再び使うことはできないだろうし、防衛することもできないだろう。しかし、われわれを防衛しようとするとき、彼らに“同志たちよ、われわれを擁護しないでくれ”と言おう。“われわれを擁護することはわれわれには都合がよくない”と彼らに言おう。」 [Padilla 1998:156]

「ブルジョア的なリベラル派の方々よ、ブルジョア的な中傷文書の書き手たちよ、CIAの手先たちよ、帝国主義の情報員たちよ、即ち帝国主義のスパイである情報機関の人々よ、キューバには入口はない、キューバには入口はないだろう、UPIやAPにも与えないように、無期限に無限の期間、無期限に入口は閉鎖されている。これがこの点について述べるべきすべてである。」[Padilla 1998:156]

このようにカストロはパディージャのような文化人を「ブルジョア的なリベラル派の人々」と呼び、彼らが客観的に果たしている役割とは、革命のために大衆ともに歩むことではなく、芸術的な追求の名の下に帝国主義に、米国帝国主義に奉仕し、それによって革命を打倒しようとする陰謀に荷担することであると論じたのである。このような主張を、確かに、一方から見ればソ連・東欧社会主義型の革命路線を最優先することを目的とした権威主義と決めつけることは容易ではあるが、明らかに米国の直接・間接的な介入によって、1961年4月に発生したヒロン湾事件やその前後にキューバ国内で発生した数千件を超えるテロ事件やサボタージュ事件が発生したことを考えれば、米国に資する芸術的活動はキューバ革命にとって害にしかならないとの判断をカストロ等の革命指導部がもったことを推定させるものであり、そのような姿勢を否定することは現実主義的な視点からは難しい。

パディージャは、カストロ政権による文化人・知識人締め付けの張本人は、文化を毛嫌いしていたラウル・カストロ革命軍事相であった見做し⁽⁵⁾、ラウルは革命プロセスを進展させる上で、文化は障害になりはするものの、決して革命の進展に寄与するものではないと考え、社会リアリズム以外の文学方法については否定的感覚しか持っていなかったと述べている [Padilla 1990:146]。キューバ政府は「パディージャ事件」を体制批判的な知識人を一掃する好機と見て、一連の知識人・文学者を追い詰める機会と捉えたようである。パディージャに拠れば、キューバ政府が最も危険視していたのはレサマ・リマであり、レサマ・リマを排除するきっかけとしてパディージャを利用した。レサマ・リマは1966年の作品『楽園』を発表して以来、国際的にも評価され、またキューバ国内においても若い文化人・知識人に大きな影響を与えており、キューバ政府にとってはこれら若い文化人・知識人がレサマ・リマの周辺に反体制派として結集することを恐れて警戒した [Padilla 1990:167-173]。レサマ・リマは、「パディージャ事件」以後1976年の死に至るまでキューバの文学界から排除されたことになる。

しかし、ラテンアメリカやヨーロッパの一部の知識人たち、特に1959年1月のキューバ革命の成立以来、常にキューバ革命を支持する側にあった知識人・文化人たちには「パディージャ事件」はキューバ革命の大きな転換であると受け止められた。一部の知識人がパディージャの自己批判は権力によって強いられたものであると憤り、さらにカストロの主張に反発してキューバ革命の路線に批判を強め、そのときまで革命を支持し固い団結を誇ってきた知識人グループを分裂させることになった。

パディージャの自己批判から7日後、カストロの演説から4日後の5月4日にバルガス・ジョサのマンションでカストロ首相宛の抗議書となる知識人たちの共同書簡が作成された。共同書簡は、フランキ、フエンテス、ゴイティソロ、バルガス・ジョサ、モンシバイス、レブエルタス、ルルフォ、サルトル、ボーボワール等60名が署名した。ガルシア・マルケスとコルタサルが署名しなかった。文面は4月9日に『ル・モンド』紙に掲載された最初の抗議書よりも厳しく、革命の権威主義化、キューバ政府の孤立主義、対話の拒否に対する憂慮とともに、パディージャの自己批判に対する「恥ずかしさと怒り」を表明していた。バルガス・ジョサは文案を書いたことを認めている。共同書簡は次のように書かれていた。

「私たちは、自分たちの感じている恥ずかしさと怒りをあなたに伝える義務があると信じています。エベルト・パディージャが署名を行った嘆かわしい告白のテキストは、革命の合法性と正当性を否定する方法によってのみ得ることができたものです。前述の告白の内容と形式は、不合理な告発と筋の通らない主張とともに、UNEACで開催され、その中で当のパディージャと同志ベリキス・クサ、ディアス・マルティネス、セサル・ロペス、パブロ・アルマンド・フェルナンデスが自己批判という痛ましい茶番

劇を受け入れざるをえなかった行事がそうであるように、スターリン主義の時代のもっとも下劣な時期を思い出させます。私たちにとり、人間の尊重と人間解放の闘いという点において模範的と思えたキューバ革命を、私たちはその初日から熱烈に支持してきましたが、それと同じくらい熱烈に、私たちはキューバが、教条的な反啓蒙主義や外国文化排斥、社会主義諸国においてスターリン主義が強いた抑圧システムを回避するよう勧告します。現在キューバで生じていることは、スターリン主義の明らかな兆しであった出来事に似ているのです。

一人の人間に、最悪の裏切りや卑劣な行為を行ったことを馬鹿げた形で認めさせるような、人間の尊厳の無視は、相手が作家だからというのではなく、いかなるキューバの同志——農民、労働者、技術者あるいは知識人——であろうと、やはり同様の暴力や侮辱の犠牲者になりうるからこそ危険なのです」。[Esteban:56-57]

署名者たちはこの書簡によって、人権の蹂躪を終わらせること、そして彼らにキューバ革命を社会主義の中のひとつのモデルと見なせた革命の本来の精神に立ち返ることを求めていた。すなわち革命プロセスの弱い時期を利用してシステムを混乱させようとする敵として問題にするのではなく、同じくラテンアメリカのために社会主義的未来と関わろうとし、明らかなことに対して見て見ぬ振りができず、不当な暴力や奪うことがおよそ不可能な自由の侵害と妥協できない政治的同志として問題にしようというのである。しかし、カストロなどの革命指導部とは明確に意識や考え方が異なっていたし、ガルシア・マルケスやコルタサルが抱いていたキューバ革命のあり方に関する見解とも異なるものとなっていき、ラテンアメリカ知識人の分裂の契機となっていった。

4. 「パディージャ事件」の意味

1972年に『“ブーム”の履歴書』を出版したホセ・ドノソ（1924～1996）は、1960年代にラテンアメリカ文学のブームが生じたと論じ、そのブームは「パディージャ事件」まで続いたと述べている。ドノソに拠れば、ラテンアメリカ文学のブームは、1962年にチリのコンセプション大学で開催された知識人会議が起点になった。この会議にはパブロ・ネルーダ（1904～1973）、ホセ・マリア・アルゲダス（1911～69）、アウグスト・ロア・バストス（1917～2005）、カルロス・フエンテス、アレホ・カルペンティエル（1904～1980）等が参加し、「ラテンアメリカ人は、自国の文学はもとより、ヨーロッパ文学、北アメリカ文学に関しても完全な知識をもちながら、手段の欠如やエゴイズム、近視眼的な出版社やその販売方法のために、互いに隔離されており、同じ大陸の他の国々の文学についてはほとんど無知であること」が一様に認識された[ドノソ 1983:40]。そして、これらのラテンアメリカ知識人は、キューバ革命を擁護するという姿勢を共有していた。このような、ラテンアメリカ知識人の共同歩調は「パディージャ事件」が起きるまで続いた。ドノソは、「1971年にパディージャ事件が起こるまで続いた」[ドノソ:63]、さらに「コンセプション大学の知識人会議において、大陸と大陸の作家たち全体を統一する政治運動への共鳴という、急激にして強大な潮流を初めて私が経験したのと同様、パディージャ事件は、忠誠心とまるまる十年に及ぶ作業を犠牲にして、その統一にひとつの終止符を打ち、1960年以前のように、些細な国内闘争にかかずらっているのではないという幻想を雲散霧消させてしまったのである」[ドノソ:64]と述べている。キューバ革命の擁護が共通の姿勢となっていたが、それが「パディージャ事件」によってその結束が崩壊してしまったのである。さらにドノソは次のように述べている。

「もしも“ブーム”がなにか完全に近いまとまりをもったとすれば——色合いの違いはあるものの——キューバの革命運動に対する信念であったと私は思う。そしてパディージャ事件によってもたらされた幻滅はその信念を破壊し、また“ブーム”のまとまりをも破壊したのだと私は思っている」[ドノソ:

64]。

「キューバでパディージャ事件と言う前代未聞の事態が持ち上がり、ラテンアメリカの知識人たちのさまざまな政治的色合いを長年にわたって受容してきた、あの広範なまとまりをぶち壊し、いまや政治的、文学的、感情的に耐え難い、和解不能な党派に分裂させてしまったのである。このパディージャ事件が、大混乱を巻き起こしながら、“ブーム”のきざしがやっと見え始めた1962年のコンセプション大学における知識人会議で、私をはじめラテンアメリカ知識人たちの間に花開くのを見た統一に、終止符を打ったのである」[ドノソ:141]。

こうして、ドノソが指摘したように、「パディージャ事件」は1960年代にキューバ革命擁護の姿勢で結束していた多くのラテンアメリカ知識人を分裂させる契機となった。これら知識人の「パディージャ事件」に対する批判はカストロ首相宛に送られたヨーロッパとラテンアメリカの知識人の抗議書に要約されている。抗議書はパディージャに対する扱いは「社会主義諸国においてスターリン主義が行った抑圧的体制」と表現していた。このようにヨーロッパやラテンアメリカの知識人たちは、カストロ体制がスターリン主義化したと見て、キューバ革命を擁護する姿勢を変更し始めたのである。しかし、「パディージャ事件」は単に「スターリン主義化」という言葉で矮小化できる事件であったのだろうか。「パディージャ事件」を理解するためには、当時のキューバが直面していた諸問題、キューバが囲まれていた国際環境の中で改めて再考する必要がある出来事であった。

まず、キューバが革命達成以来、一貫して日常的に米国からの攻撃の可能性に直面していた事実が考慮されねばならないであろう。1961年4月に起きたコチノス湾での反革命軍の逆上陸戦、翌62年10月のキューバ危機に関連するカストロ政権打倒を目指す「マンゲース作戦」とどまることなく、日常的にCIAを背景とした革命政権打倒工作が実施されていた。このような環境下では、純粋なイデオロギー論争だけで路線を決定することは困難な状況にあったわけであり、事態の進展に応じて臨機応変に対応する現実主義的な路線の操作が必要とされた。それ故に1968年中にキューバ国内で生じた諸事件は一見整合性が欠けるように見える様相を呈したものと考えるべきであろう。特に、同年1月の親ソ派の「ミクロフラクション」グループの粛清、それに続いた3月の個人営業の全面廃止という理想主義的な措置、他方これらに反するように見える8月のチェコスロバキア侵攻支持、と体制批判的な知識人に対する締め付けの強化、これらは一見整合性に欠ける。一般的には、キューバは同年前半には理想主義的な独立路線をとっていたものの、後半にはチェコスロバキア侵攻支持を皮切りとして親ソ路線化を強めて行ったとの解釈が行われる。しかし、果たしてそうであったのか、同年の前後半の間に整合性が欠けると見られる現象が生じたが、そこにこそキューバ革命の特徴的な性格があったのではないだろうか。「パディージャ事件」も、単に親ソ化したキューバにおいて見られたスターリン主義化の結果と見るのではなく、キューバ革命の独自性という面から評価すべきであると考えられる。チェコスロバキア侵攻支持とその後の知識人・文化人への締め付けの強化も、親ソ化やスターリン主義化という枠組みで解釈するのでは不十分であり、キューバにとって社会主義圏共同体の存在が必要であり、それを崩壊させかねない「プラハの春」と言われた民主化運動のあり方を問題視した結果としての侵攻支持であったと考えられ、「パディージャ事件」もチェコスロバキアに類似した運動に発展することを予防したため生じた事件であったと解釈されよう。

米国からの日常的な脅威を前にカストロ政権がなすべきことは、革命を前進させること、経済発展を達成すること、そのために国民の団結と結束を固めること、そして米国に対決できる国際環境を堅持することであった。このような環境の中で、革命前の有産階層と中間層出身の知識人・文学者の中で革命路線に消極的な人々が体制批判的な姿勢をとることは考えられる。そして、カストロ体制が彼らに対する締め付けを強化し、革命路線に忠実であることを求めたのであり、これを単に親ソ化に発したスターリン主義化であると決めつけることは、当時のキューバが直面していた諸問題を軽視することになる

う。従って、「パディージャ事件」に際して、1971年5月4日にヨーロッパとラテンアメリカの知識人がカストロ首相宛に送った抗議書には、明らかに事実誤認があったと言える。彼らはカストロ体制による文化人・知識人に対する締め付けの強化をソ連・東欧社会主義諸国にみられたスターリン主義化と見なしたのだが、彼らは当時のキューバが必要としていた国民の団結と結束の強化という問題を十分に理解していなかったと言える。確かに、文化人・知識人に対する締め付け強化は表現の自由の侵害であると評価することはできよう。しかし、表現の自由に対する寛容さは、その国の特定の発展段階に応じて考慮されるべきであり、決していかなる時期にも適用すべき絶対的な基準であると見なされるべきではないだろう。スターリン主義は批判されるべきではあろうが、1960年代にキューバ革命を擁護したヨーロッパやラテンアメリカの知識人の多くが「パディージャ事件」を契機としてカストロ政権から離反していった現象は、ある意味ではキューバの実情を軽視した姿勢であったと言える。

5. おわりに

本稿は、ラテンアメリカ諸国において1968年に生じた現象を分析することを対象とするものであり、世界的な「1968年現象」との関連でキューバにおいて1968年に生じた出来事を総括すれば、これまでに分析したメキシコやペルーなどの他のラテンアメリカ諸国と同様に中間層に関わる現象であったと言える。先進諸国においては、資本主義経済の発展に伴って1960年代に中間層が増加して大学進学者数も増加した結果、1968～70年にはマスプロ教育に見られるような教育の質の低下が生じる一方で学費値上げが行われるなど、「若者の叛乱」と呼ばれるような現象が生じた。他方、途上国においては同様に資本主義経済の発展によって中間層が成長したものの、政治システムや社会制度がまだ中間層の意向が反映できる水準には達していなかったため、中間層の不満が爆発するような現象を生じた。

一方、キューバにおいては、資本主義諸国の経済成長が見られた1960年代に社会主義化を推進しなければならない状況下にあった。しかも、革命を打倒しようとする米国の脅威が目前にあり、社会主義化を進展させねばならなかったキューバにとって、革命前からの中間層の動向は革命路線の推進にとって死活問題となっていた。1963年までに25万人が脱出し、また1965年には約5000人が脱出したとはいえ、国内にはいまだ革命に十分一体化できない階層が残っていたことは確実であり、「パディージャ事件」はそのような旧中間層出身の知識人層の去就が革命の前進を損なう可能性を増大させた時期に起きたことを考慮するならば、先進諸国と途上諸国の双方の資本主義システムの諸国とは異なって、中間層の社会的位置づけが異なる社会主義国であるキューバに生じた特有の出来事であったと言える。しかも、キューバにおいてはカストロ指導部が「マイクロフラクション」グループに批判された通り、旧「7月26日運動」を出身母体とする中間層出身者から成っていたことを踏まえれば、さらに複雑な問題を内包していたと言える。カストロ指導部は、国民の意識高揚を助長するとともに、中間層の体制批判的な部分を締め付けることによって、1970年前後に生じた革命の危機的段階を乗り越えようとい図したのであり、その象徴として起きたのが「パディージャ事件」であったと評価できよう。旧中間層のかなりの部分が1959年1月のキューバ革命を実行し、あるいは同調したが、革命プロセスの中で社会主義化を選択する中で、労働者派である「マイクロフラクション」グループを粛清してまでも、カストロ指導部が自立的なキューバ型革命路線を遂行していく過程で、急激な権威主義化に同調できない文化人・知識人に対する思想的締め付けを必要と判断したのが、1968年であったと判断される。

「パディージャ事件」に発した文化人・知識人の社会的姿勢を問題視する環境は文学活動に実質的な制限をもたらし、その結果1970年代初めにメキシコやペルーやアルゼンチンのようなラテンアメリカの他の国々では文学が隆盛を誇っていたのに対して、キューバにおいてはその時期には良質の作品が目玉に値するほど欠けていることから文芸批評の分野で「灰色の5年」と名付けられている事態を引き起

こした。思想検閲が文学活動を停滞させるという結果が生じたのである。旧中間層出身者の文学活動が締め付けられた結果である。

〈注〉

- (1) フランキは、革命戦争中はカストロ兄弟たちとともに「7月26日運動」に属して反乱軍の機関誌『レボルシオン (Revolución)』誌の編集長やラジオ放送『ラジオ・レベルデ (Radio Rebelde)』の局長としてシエラ・マエストラ山中で反バチスタ闘争を闘い、革命後も『レボルシオン』誌編集長として広報部門で活躍したが、革命指導部とは距離を置くようになり、イタリア滞在中の1968年8月にカストロによって行われたチェコスロバキア侵攻支持表明に反対して亡命した。1990年以降、プエルトリコに在住していたが、2010年4月16日に同島のサンホセで死亡した。
- (2) ゲバラは、1963年11月に開始された全国電化計画のキャンペーン中から「新しい人間」という言葉を使い始めたが、『ヌエストラ・インドゥストゥリア (Nuestra Industria)』誌1964年2月号に掲載された「予算融資制度について」と題する論稿の中で、物質的刺激に鼓舞されるのではなく、革命プロセスの中で求められた目標達成に向けて使命感を有する生産者としての労働者の意識高揚の重要性を指摘した [小倉 2004:127-128]。
- (3) カブレラ・インファンテは外交官として在ベルギー大使館在勤中に母の死亡によって1965年に帰国した際に逮捕され、4ヶ月の拘束後出国を認められてスペインに亡命し、マドリッド、バルセロナに居住したがフランコ政権から歓迎されず、その後ロンドンに居を定めた。フランコ死後の1997年にセルバンテス賞を受賞、2005年2月21日にロンドンで死亡した。弟のアルベルト (通称サバ)・カブレラ・インファンテは、1965年にイタリア滞在中に政治亡命し、翌1966年にニューヨークに移動し、2000年にマイアミに転居した後、2002年5月29日にマイアミで死亡した。
- (4) レサマ・リマは、1993年にグティエレス・アレア監督が制作したセネル・パス (1950～) の短編を原作とする映画『苺とチョコレート (Fresa y Chocolate)』の中で肯定的に扱われたほか、2011年に雑誌『革命と文化 (Revolución y Cultura)』によってレサマ・リマ特集が生まれ、さらに『楽園』が映画化されるなど、キューバが1990年代にセクシュアル・マイノリティ差別を克服していく中で復権された。現在、毎年公表されるカサ・デ・ラス・アメリカス詩賞はレサマ・リマの名が冠せられている。
- (5) フランキは、1988年に出版した『カストロと言われる男の人生、冒険、災害』の中で、「親ソ派、ラウル・カストロ、国家公安局、文化官僚はカサ・デ・ラス・アメリカスに対して好意的ではなかった」と述べており、ラウル・カストロが文化人・知識人に対して冷淡であったと証言している [Franqui 1988:365]

〈参考資料〉

小倉英敬

2004 「ゲバラとマリアテギ その思想的接点」『現代思想』2004年10月臨時増刊号, 120-128

Arenas, Reinaldo

1996 *Antes que Anochezca*, Tusquets Editor (安藤哲行訳『夜になるまえに』, 国書刊行会, 2001年)

Cabrera Infante, Guillermo

2011 *Tres Tristes Tigres*, Editorial Seix Barral S.A., Barcelona

Donoso, José

2007 *Historia Personal del "Boom"*, Aguilar Chilena de Ediciones S.A., Santiago de Chile (内田義彦訳『ラテンアメリカ文学のブーム 一作家の履歴書』, 東海大学出版会, 1983年)

Edwards, Jorge

1973 *Persona Non Grata; An Envoy in Castro's Cuba* (Translated in Spanish by Colin Harding), The Bodley Head, Toronto

Esteban, Ángel / Stephanie Paniehelli

2004 *Gabo y Fidel; El Paisaje de Una Amistad*, Editorial Espasa Calpe S.A., Madrid (野谷文昭訳『絆と権力 ガルシア＝マルケスとカストロ』, 新潮社, 2010年)

Franqui, Carlos

1976 *Diario de la Revolución Cubana*, The Viking Press, New York

1981 *Retrato de Familia con Fidel*, Editorial Seix Barral S.A., Barcelona

1988 *Vida, Aventuras y Desastres de un Hombre Llamado CASTRO*, Editorial Planeta S.A., Barcelona

2006 *Cuba, La Revolución ¿Mito o Realidad?; Memorias de un Fantasma Socialista*, Ediciones Península, Barcelona

Fuentes, Norberto

2000 *Condenados de Condado*, Editorial Seix Barral S.A., Barcelona

2002 *Narcotráfico y Tareas Revolucionarias El Concepto Cubano*, Ediciones Universal, Miami

Otero, Lisandro

1998 *Llover sobre Mojado Memorias de un Intelectual Cubano 1957-1997*, Editorial Planeta Mexicana S.A., México

Padilla, Heberto

1990 *Self-Portrait of the Other* (translated from in Spanish "La Mala Memoria", by Alexander Coleman), Harper & Collins, Toronto

1998 *Fuera del Juego*, Edición Conmemorativa, Ediciones Universal, Miami

Vives, Juan

1981 *Les Maitres de Cuba*, Opera Mundi, Paris (山本一郎訳『恐るべきキューバ』, 日本工業新聞社)